

歴史と環境：歴史地理学の可能性を探る

溝口，常俊
名古屋大学大学院環境学研究科：教授

阿部，康久
九州大学大学院比較社会文化研究院社会情報部門：准教授

<https://hdl.handle.net/2324/1398514>

出版情報：2012-12-20. 花書院
バージョン：
権利関係：



第7章

担い手の体験にもとづく牛突きの歴史

—— 隠岐における松井忠雄さんの記録と記憶から

石川 葉 央

キーワード：隠岐，闘牛，伝統行事，担い手，ライフヒストリー

I はじめに

1. 本稿の目的

本稿の目的は、隠岐で行われている闘牛の歴史を一人の担い手の記録と記憶から振り返り、担い手にとっての闘牛の意義をより鮮明に示すことである。筆者は、2002年2月から2003年10月にかけて隠岐で闘牛に関するフィールドワークを行った。その結果をもとに石川（2004）や石川（2005）では、隠岐の闘牛がいかんして継続してきたのか、それが地域に対してどのような意義を持っているのかを考察した。調査では、聞き取りに加えたくさんの資料を集めたが、論文の中で取り上げることができたのはその一部であった。そこで本稿では、闘牛との多様で豊かな関わりを築いてきた一人の牛主に焦点を当てることで、担い手の人生に闘牛がいかなる影響を与えているのかを検討したい。

これまでの論文でわずかにしか取り上げられなかった、闘牛の変遷を示すもっとも貴重な資料の一つが闘牛大会の取組表である。石川（2005）では、これを用いて各大会に出場した牛の数を示すにとどまった。しかし、取組表には、各大会において出場した牛の名前に加え、その飼育者の居住地、屋号が示されており、1頭ずつの牛に関する詳細な記録となっている。石川（2004）では、愛媛県南予地域における闘牛大会に、どこに住んでいる牛主が牛を出場させているのかに着目し「出牛圏」と名づけた。出牛圏はその大会がどの範囲まで影響力を持っているかが分かり、数年にわたる分析をすることでその変遷をも知ることができる。そして出牛圏には、各地域における産業の変化や牛主同士の関係が反映される。本稿では、一人の牛主の体験とそ

の牛主が保存していた取組表のデータを組み合わせる。そして、隠岐における闘牛の歴史について、出牛圏と個人の体験を合わせて記し、時間の流れの中で担い手にとって闘牛がいかなる意義を持つのかを検討する。

2. 対象地域と牛突き

隠岐は、島根県本土の北東に位置し、人が住む4つの大きな島と、約180の小島からなる。もっとも大きな島を島後^{とうご}、その西南方向の西ノ島、中ノ島、知夫里島^{ちぶり}の3島を島前^{とうぜん}と呼ぶ(図1)。総面積は約346km²で、2010年の人口は、21,688人(国政調査)である。主な産業の一つに伝統的な放牧による大規模な肉用牛繁殖経営が挙げられる。島後の4つの町村、すなわち西郷町^{さいごう}、五箇村^{ごか}、都万村^{つま}、布施村は2004年に合併し、隠岐の島町となった。本稿では聞き取りを行った当時を反映し旧町村名を用いる。

隠岐の闘牛は、農耕使役の合間の娯楽として鎌倉時代に島前で始まり、江戸時代中期以降に島後へ伝播したと推定される(神村1994)。明治時代に肉牛の品種改良のため雄牛の放牧が禁止されると、1907年を最後に闘牛は島前では行われなくなった。これに対し、島後では農耕牛や肉牛を闘わせることで、牛の値段が高くなったため、ますます闘牛が盛んになった。その後、1950年代後半からの肉牛価格の下落、1960-1970年代における農業の機械化により、農耕牛、肉牛を飼う家庭が減ると闘牛も減り始めた。1960年代以降、生

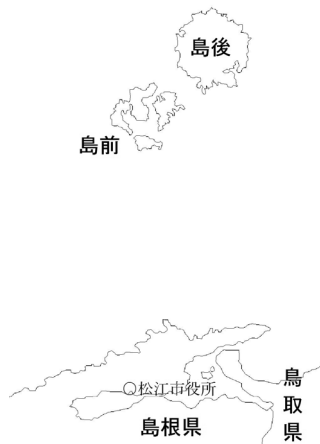


図1 隠岐と島根県の位置関係

業との関連が弱くなった島前の闘牛が消滅しなかったのは、1970年代からの闘牛の観光化、1980年代からの行政の支援によるところが大きい。隠岐では闘牛という行事のことを「牛突き」、闘牛用の牛のことを「突き牛」、闘牛場を「牛突き場」、牛が闘うことを「突く」という。本稿でも現地の呼び方になり、これらの言葉を用いる。また、闘牛大会を「大会」と省略する。

3. 聞き取り対象者と牛突きの記録

本稿における主人公は、元牛主の松井忠雄さんである。松井さんは1926年に西郷町の原田に生まれ、県の職員をしながら牛突きと関わり続けてきた。本稿では、松井さんが隠岐に住み、牛突きと深く関わっていた時期、すなわち仕事で松江に赴任する前と退職後を中心に構成する。松井さんは、郷土歴史家としても活躍し、いくつかの著書を執筆している。また彼は戦後に行われた大会の取組表を保管し、各大会におけるエピソードを記録してきた。筆者が集めた取組表は、1949年から2002年までの167枚であり、そのほとんどは松井さんの保管によるものである。取組表は、各町村における本場所大会が行われる、佐山牛突き場（都万村）、一夜ヶ嶽牛突き場（五箇村）、池田尼寺原牛突き場（後に池田国分寺外苑牛突き場を経て隠岐モーモードームに改称、西郷町）、引き分けの稽古大会を行う天健神社内牛突き場（都万村）、姿沢牛突き場（五箇村）、上西神社外苑牛突き場（西郷町）、下西玉若酢神社外苑牛突き場（西郷町）に出場した牛のデータが記されている。本稿ではこのうち、牛主たちがメインの大会と位置づける本場所大会の出牛圏を取り上げる。

II 松井忠雄さんと牛突きとの関わり

1. 牛突きの復活と八朔大会

松井さんは、小学校に入学する前から牛そのものが大好きだった。夕方、家の前の道を牛主に連れられて牛が鳴きながら歩いていくと、その声を聞いて「あれは～に住んでいる～さんの牛だ」と当てることができたという。6歳のころ、祖父に連れられて佐山牛突き場で行われた八朔大会を見に行ったのが、初めて見た大きな大会であった。そのころは、ほとんど各集落の河川敷に牛突き場があった。激しい突きをする牛は、突きながら川に入ってしまう引き分けることもできず大変だったという。

松井さんは学校を卒業すると突き牛を飼い始めたが、戦争中は牛突きは中止されていた。1939年ごろには食糧難で兵隊の食料にするために牛を何月何日に徴用で出してくれという、いわば牛の召集令状が来るようになった。松井さんも志願して戦争へ行き、1945年に隠岐へ戻ってきてすぐに突き牛を飼い始めた。ところが同じ年に、牛突きはGHQによって動物虐待との理由で禁止された。隠岐だけではなく全国の闘牛、闘鶏、闘犬などが止められた。松井さんは「闘争心をあおるようなこと、軍国心の復活を恐れたんじゃないかと思う」と語る。隠岐の人々はせっかく復活させた牛突きを止められてがっかりした。その当時は電気もまだついていない世帯もあり、隠岐の数少ない娯楽を止められたらたまったものではないということで、陳情書を出すことになった。隠岐の新聞記者や、牛主をしていた医師が音頭を取って陳情書を書き、署名を募るとあつという間に集まった。それを鳥根の分駐所がある松江まで出しに行った。松井さんはその時22歳で陳情者の一人であった。陳情を受けた分駐所の隊長が部下を連れて視察に来ることになった。そこで松井さんたちは、闘争心がなくもっとも突かないことで評判の牛を連れてきて、無理やり突かせた。さらに肥えた牛とやせた牛を連れてきて「肥えた牛は牛突きで適度に運動し、手入れをするからこんなに血つやもよくて太っている、牛突きをさせない牛はこんなにやせて色艶も悪い」と説明した。隊長は通訳を通じて「隠岐の人はこれの何が面白いんだ？闘牛はむしろ虐待じゃなくて愛護だ、怪我もさせないし牛も太るし」と言って笑ってその場を去った。隊長の言葉を固唾を呑んで見守っていた仲間たちは、胸をなでおろしたという。陳情のかがあって1948年9月1日に隠岐の牛突きは全国に先駆けて解禁となった。

松井さんは、復員して隠岐に帰ってきてから、仕事で松江に赴任する1957年まで突き牛を飼っていた。松井さんが牛突きの記録を取ろうと思いついたのは、陳情で牛突きが復活した翌年の1949年のことである。その年の八朔大会では、1組の勝負で対戦時間が1時間40分という最長記録が出た。その時、松井さんの後ろで見ていた人が「勝った牛はその間1度も舌を出さなかったが、負けた方は23回舌を出し入れした」と言った。それを聞いた松井さんは「はてな、ただ見ているよりも後のためにこういうことを記録しておくのはいいことだな」と思って記録を始めた。牛は突きながら呼吸が苦しくなると舌を出し、さらに疲れてくると放尿、脱糞するので、こうした症状が先に出た牛が負けることが多い。松井さんは取組時間だけではなく、何分で舌を

第2部 歴史と社会環境

出し、何分で尿を出したかという記録も取り始めた。

大会は午前から始まって、夕方までには終了するが、松井さんが残している記録によれば、午後7時過ぎまで続いた大会もあったという。9月ともなると、その時刻には日が暮れてしまい闘いの様子が見えない。2頭の牛は黄色いたすきをかけて突き合い、観客にはたすきだけがあっちへ行ったりこっちへ来たりするのが見えた。やっと勝負がついたものの、牛主でさえもどちらが勝ったのかが分からなかったという。勝った牛主が負けたと勘違いをし「(負けたけれど)あの牛相手にあんなけ突いてくれて上等上等」と言い、自分の牛が勝ったと聞かされてびっくり。しかも負けた牛主は自分が勝ったと思いつんでお祝いの支度を始めていたという。

さて、松井さんが記録を取り始めた佐山牛突き場の八朔大会は、明治時代にはすでに始まっていたとされ、隠岐を代表する大会と言われる。図2を見るとこの大会には都万村の中心集落である都万を中心に、西郷町と五箇村からも多くの牛が集まっている。八朔大会の位置づけは他の大会とは異なるのであろうか。隠岐の島後は、1969年までは周吉郡(西郷町、布施村)と隠地郡(都万村と五箇村)に分かれていた。八朔大会が行われる佐山は、ちょうど周吉郡と隠地郡の境界線上にある。松井さんは、両方の地域から牛を引き出すのにちょうどよい場所に佐山があり、その場所が牛突き場になったのではないかと推測する。さらに松井さんは、五箇村からの出牛に注目する。大

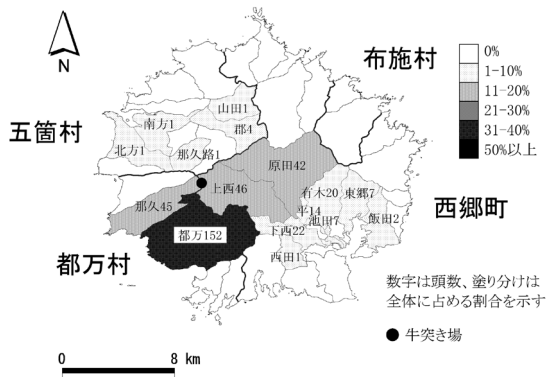


図2 都万村佐山牛突き場における八朔大会の出牛圏(1949-1969)

注) 取組表により作成。

会は、隠岐で盛んな古典相撲とやり方と同じく、大会の主催者側である「座元」とその他の地域から来る「寄方」の対戦で行われる。五箇村の牛は、現在では組み合わせによって座元から出たり寄方から出たりしているが、戦前

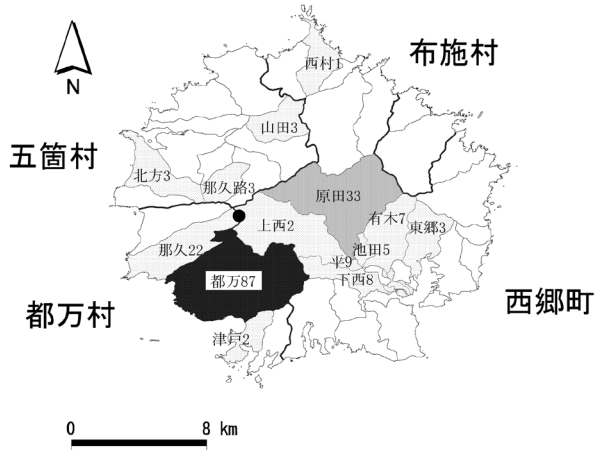


図3 都万村佐山牛突き場における八朔大会の出牛圏（1972-1985）

注) 凡例は図2と同じ。取組表により作成。

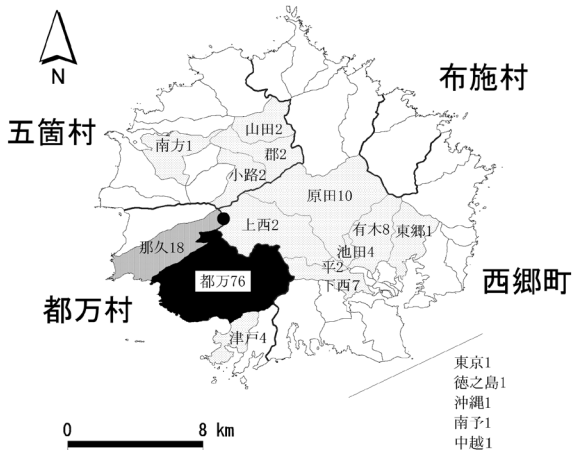


図4 都万村佐山牛突き場における八朔大会の出牛圏（1986-2002）

注) 凡例は図2と同じ。取組表により作成。

第2部 歴史と社会環境

には全て座元から出ていたという。八朔大会の出牛圏には、隠岐を2分する周吉郡（西郷町）と隠地郡（都万村と五箇村）の代表選手として牛を選び、闘わせて来たという経緯がありそうである。

図2から図4まで、布施村からは1頭も牛が出ていない。同じ島なのに、他の町村と比べてこれほど顕著な違いがあるのはなぜであろうか。松井さんによれば、布施村には、卯敷、本郷、飯美の3つの集落があり、水田は卯敷に2～3ヘクタールあっただけで、他の集落には全くなかった。牛を飼うには飼料や牛舎の下に敷くために藁が必要であるが、水田がないために藁もなく、牛を飼える状態にはなかった。布施村は林業が盛んで、村有地の材木を売って村営を賄っていたので財産は豊かで、村民税もなかった。1969年に郡を廃止して西郷町ができた時にも、裕福だったので西郷町への合併は必要ないと加わらなかった。また、布施村には牛がいなかったことに加え、佐山への距離の問題もある。車がなかったころは、西郷町から都万村の佐山に牛を歩かせて連れていくだけでも大変なのに、さらに遠い布施村からでは、無理であったという。もし、牛主がいたとすれば、他の町村の牛主に牛を委託してオーナーをしていた可能性はあるけれども、そのような話は聞いたことがないと松井さんは言う。同じ島の中であっても、歴史の中で牛を飼うという経済的な必要がなければ、牛突きは根付かないということである。その土地の産業や土地利用などの条件が、牛突きのような伝統行事が生まれ、継続していくために不可欠な要素であることが分かる。

産業との関わりでは、畜産業は突き牛の増減に大きな影響を与えてきた。松井さんは、終戦直後、ちょうど隠岐で牛突きが復活した1948年ごろから、牛の値段が急速に上がり、家畜商は笑いが止まらなかったと振り返る。今日飼っている牛の価値が、明日には倍になるような時代であった。たとえば、350円で買って育てた牛が、体重が600キロくらいになると1000円で売れた。飼い主が驚いて喜びを隠しきれず「家の牛は1000円で売れた。誰にも言うな、誰にも言うな」と触れて回っていたという。そのため多くの人が子牛を買おうと生産地である島前に殺到し、くじ引きで抽選せねばならなかったほどであった。こうした畜産熱が後押しをして、牛突きが再開した頃には、突き牛が200頭以上いた。

2. 西郷町における大会

西郷町における大会の変遷を図5から図7で見よう。図5に見られた

八田、西町、中町、港町など、都市部からの出牛が、図6になると減り、図7にはほとんど見られない。松井さんによれば、突き牛が減ってきたのは1970年代からで、特に1985年ごろから急速に減った。都市部からの出牛を担っていたのは企業であった。社長が牛好きだったり、企業の宣伝をするために飼わせていたものである。牛突きが盛んであった頃は「Pホテル」では12～13頭、「N建設」では8頭の突き牛が育てられていた。それだけ突き牛を飼っていると、練習のために毎日のように牛を突かせねばならない。そのためには、1頭につき綱取り（勢子ともいい、牛突きの最中に牛をけしかける）と綱持ち2人が必要で、2頭で練習させれば合計6人の社員を休ませなければならぬ。突き牛を管理するために、自社の仕事ができなくなってしまう。バブルがはじけて景気も悪くなってくると、そうした企業は突き牛を手放すようになった。出牛圏はこうした経済的動向の影響を強く受けている。

次は出牛圏の広がりという観点から見てみよう。西郷町では、図5で島外からの出牛がある。その多くは島外の牛主が隠岐の牛のオーナーになったり、隠岐で全国大会を行う時に、記念として島外の牛主の名前を借りたものである。必ずしも島外から牛を運び込んだわけではないが、西郷町における

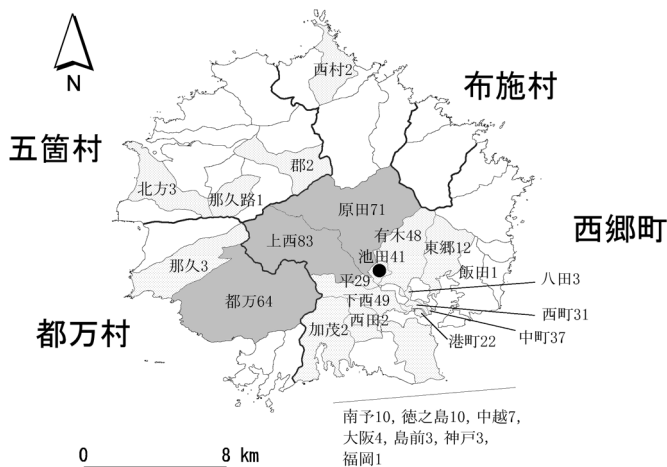


図5 西郷町池田尼寺原牛突き場における大会の出牛圏（1966-1987）

注）凡例は図2に同じ。取組表により作成。

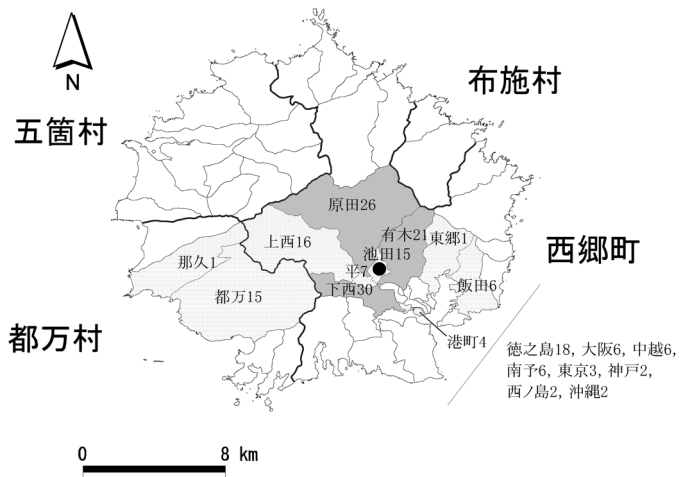


図6 池田国分寺外苑牛突き場における大会の出牛圏（1988-1998）

注) 凡例は図2に同じ。取組表により作成。

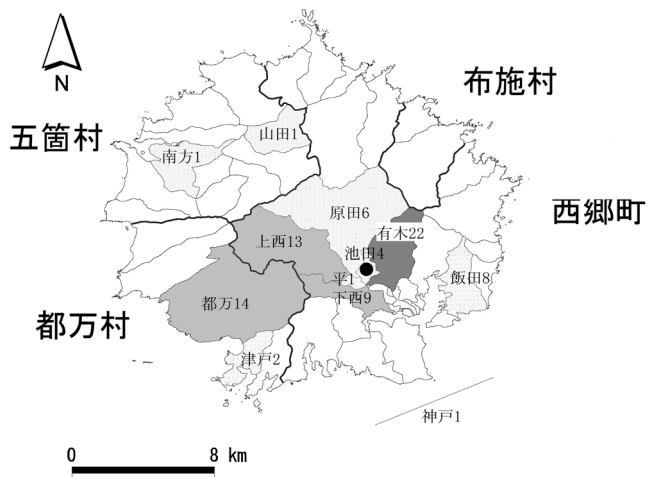


図7 隠岐モーモードームにおける大会の出牛圏（1999-2002）

注) 凡例は図2に同じ。取組表により作成。

大会では他の村と比べて全国的な交流が進んでいたといえる。取組表によれば、全国大会の先駆けは、1973年における全隠岐闘牛連合会結成記念大会であり、西郷町の池田尼寺原牛突き場で行われた。1977年には隠岐・宇和島の対抗牛突き大会、1988年と1989年には全日本牛突き隠岐の国大会が行われている。また1988年には「ザ・闘牛 徳之島 in 隠岐の島」も開催された。

西郷町は、隠岐で最も人口の多い町であり、大会を運営する組織である全隠岐闘牛連合会ができた時にはその中心となって設営に関わってきた。1980年代の大会は西郷町が初めて牛突きの観光化に乗り出し、もともとあった池田尼寺原牛突き場の近くに建設した屋根付きの「国分寺外苑牛突き場」の完成を記念したものである。1999年にはこの牛突き場を大幅に改修した「隠岐 モーモードーム」が完成した。これに伴うソフト事業として隠岐が声をかけて始まったのが、現在も全国の闘牛開催地が持ちまわりで行っている全国闘牛サミットである。このように、全国の闘牛開催地との交流は、闘牛の観光化や行政の支援とも係わり合いながら進んでいった。他町村に先駆けて観光化に取り組み始めたのが西郷町であったため、全国との交流も早い時期から盛んになったと考えられる。

松井さんの話に戻ろう。1988年に西郷町で開かれた「ザ・闘牛 徳之島 in 隠岐の島」は、徳之島出身で神戸に住んでいる牛主たちが、隠岐で開いた大会である。宣伝や出場の交渉など、大会の運営全てを他の闘牛開催地の牛主が行うという異例の大会であった。この大会には、主催者が島外から牛を連れてきた牛と、隠岐の牛が出場した。島外から連れてこられた牛は、隠岐の牛主たちが空いている牛舎で預かった。松井さんの牛舎にも2頭の牛がやってきた。松井さんは、主催者が世話に来ていない時に、ガスでお湯を沸かして体についている糞をきれいに落としてやったり、外に出して運動をさせたりしてかわいがった。大会がぶじ終わって帰っていく時、その牛を乗せたトラックが松井さんの牛舎の前を通ると、牛が懐かしそうに2回ほど声を出して鳴いた。牛というのは、可愛がればその人が分かる、と松井さんは言う。牛は大きな動物であり、飼うにはそれなりの大きさの場所が必要となる。島外の者が主催した大会であっても、牛を預かったことによって、牛との関わりとして松井さんがこの大会を記憶していることは印象的である。

Ⅲ 突き牛を介した社会関係

1. 1 頭目の牛 — 売買を通じた社会関係

本章では松井さんが退職後に飼った3頭の牛のエピソードを振り返りながら、突き牛を介して作られる社会関を検討する。

牛突きの世界では牛主が同じ牛を生まれてから死ぬまで飼うということは少なく、他の牛主から望まれたり本場所大会で勝ったりしたのをきっかけに牛を手放し、新しい牛を買う。牛主によって、牧場で将来性のある子牛を見出す力量、子牛を突き牛としての目鼻がつくまで育てる技術、勝負に勝つようなトレーニング方法など、得意分野が異なっている。そのため、突き牛の転売のサイクルがバランスよく回れば、隠岐全体としての牛突きが安定して維持される仕組みになっている。また牛と牛主との相性もあり、ある牛主のところで振るわなかった牛が、他の牛主に転売されてから強くなる場合もある。そのため、牛主たちは必ずしも1頭の牛に固執することはない。売買においては、勝ち続けている牛は高く売れ、負けた牛は安くなるというのは経済的に見れば自然なことである。しかし、隠岐において突き牛の売買をすることは、単なるお金のやり取り以上に、牛主同士のつながりを作るといった側面がある。松井さんの事例で見てみよう。

肉牛の価格の下落や景気の悪化が原因で、突き牛は減り始めた。1949年から続けられた八潮大会も、1970年と1971年には頭数不足のため、中止となっている。1984年、定年退職した松井さんは、隠岐へ戻りさっそく突き牛の飼育を再開した。その時に出会ったのが、同じく西郷町に住む牛主Tさん(1954年生まれ)である。松井さんは、Tさんが飼育している牛を気に入り、売ってくれるようお願いするとTさんは快く承知してくれた。牛を買いに行く日、松井さんは親戚と一緒にTさんの自宅を訪れた。するとTさんはそれを歓迎するために膳を用意しており、吸い物からほかのものからご馳走にあずかることになった。お互いに喜んで色々な話をしたあと、Tさんが親しい人を連れて松井さんの家についてきて、松井さんの家でもお祝いをした。松井さんは「私も久しく牛を飼っていなかったが退職して、Tさんが快く牛を譲ってくれたので、晴れて牛を飼い始めることができた。これからまたよろしくお願いします」と挨拶をして、ドンちゃん騒ぎとなった。その夜、松井さんは11時半に寝床についたが、ハッと気づいて大声を上げた。妻がびっくりして「何かね、また大きな声を出して？」と尋ねた。松井さんは突き牛

飼育を再開できる嬉しさで我を忘れて、Tさんに肝心の牛の代金を渡すのをすっかり忘れていたのである。その夜はもう遅かったので、夜が明けるのを待って朝6時になると同時にTさんに電話をかけた。すると、Tさんの母親が出た。Tさんはすでに裏で牛の世話をしており、電話がかかっていることを伝えると、「松井さんじゃーが、分かった分かった言っちゃいな」と言ったという。実は前の晩、Tさんは牛を譲って帰宅した時に、家族からお金を受け取ったかどうかを尋ねられた。それに対しTさんは「松井さんは久しぶりに牛を飼って嬉しゅうてこらえられんところだから、払わんのじゃなくて忘れておるけん、請求なんかすんなよ。笑われるけ」と答えたという。その日、松井さんは改めて牛の代金を持参した。Tさんが言った言葉を後からきいて感心していると、Tさんは松井さんから受け取ったお金を神棚に上げてろうそくに火をつけた。その当時のTさんは37、8歳。若い人が自分が渡したお金を拝んでくれたのを見て、この人は大したもんだなあという気持ちが芽生えたという。

それまでは、松井さんはTさんという牛の好きな人がいるということを知っていたが、「こんにちは」と挨拶をする程度で、親しく言葉を交わしたことはなかった。ところが、この突き牛の売買を通して、松井さんとTさんは親しくなり、今でも年の離れた兄弟のような付き合いををしている。Tさんは牛突きに関する近況報告を兼ねて、月に2回は松井さん宅を訪ねる。付き合いは牛突きだけにとどまらず、正月にはTさんは和服を着て松井さんを訪れ、松井さんもTさんの集落の祭礼がある時には必ず立ち寄るという。松井さんが隠岐で行われた大会のためにゲートボールのライセンスを取ると、Tさんもそれに感化されて一緒に取った。牛の売買をきっかけに始まった交流が牛以外のところにも広がっている。牛を介したやり取りは時として、日常生活では見ることができないような、人としての器を感じあえるようなやり取りにつながる。それが突き牛を介した新たな社会関係を作っているのである。

2. 2頭目の牛 — 飼育で生まれる牛への愛着

Tさんから譲ってもらった牛を手放した後に買った2頭目の牛は、松井さんの家に最も長くいた牛であり、家では「黒」と呼んでいた。五箇村の一夜ヶ嶽大会(図8)に出ていた牛で、牛の目つきにほれ込んで五箇村の牛主から買った。この牛が生まれたのは島前の知夫村で、その生産者とも親しく交流

第2部 歴史と社会環境

し、彼が家に来たこともある。ちょうど来た時に、練習試合で松井さんの牛が大活躍したのを見て、その生産者は大喜びで帰っていったという。この牛は練習試合でも大会でも、1回も負けなかった。始めからぱっと相手に向かっていく牛ではないので向こうにやられっぱなしになるが、突くうちに徐々に意地の出てくる牛だった。特に、右の角を斜めから利かせる牛で、牛の弱点である鼻梁のところをつーと角でかすめて、相手がひるんだ所を突いていくと早かった。松井さんによると、「黒」の前の牛主は碎石現場で働いていてあまり世話をする時間がなかったが、自分は退職して牛専門みたいなものだったので、とくかく牛の手入れをきちんとしてやろうと思ったという。そして、米子から2万5千円くらいかけて買って来た特別な刷毛で朝、夜、寝る前に、牛のふけがたまらなように毛並みの手入れをしてやった。牛は動物なので何があるか分からない、万が一攻撃されて怪我をした時に「油断していたからだ」と人に笑われないように、黒の手入れをする時はきちんとなつないで行ったが松井さんに角を向けたことは一度もなかった。終わって綱をはずす時には、単にはずしてやるのではなく、顔のあごの辺りをさすってやってからはずした。こうして、松井さんのもとの黒は見違えるほど太って毛並みも良くなった。大きくなることを隠岐の言葉で「がいになる」とい

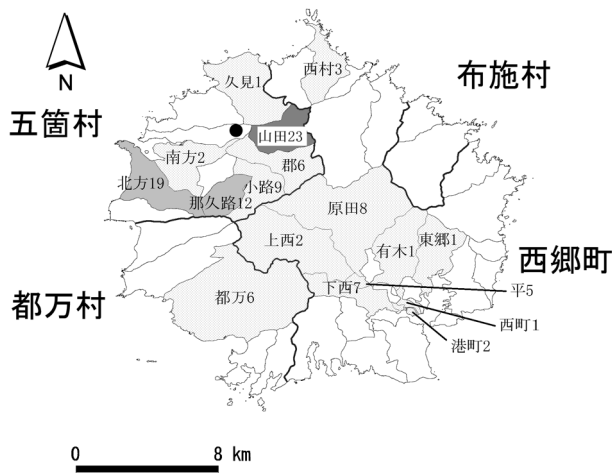


図8 五箇村一夜ヶ嶽牛突き場における一夜ヶ嶽大会の出牛圏（1974-1983）

注）凡例は図2に同じ。取組表により作成。

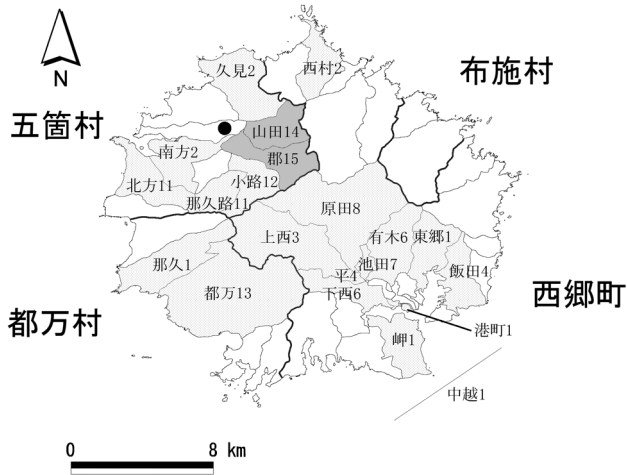


図9 五箇村一夜ヶ嶽牛突き場における一夜ヶ嶽大会の出牛圏（1984-1993）

注) 凡例は図2に同じ。取組表により作成。

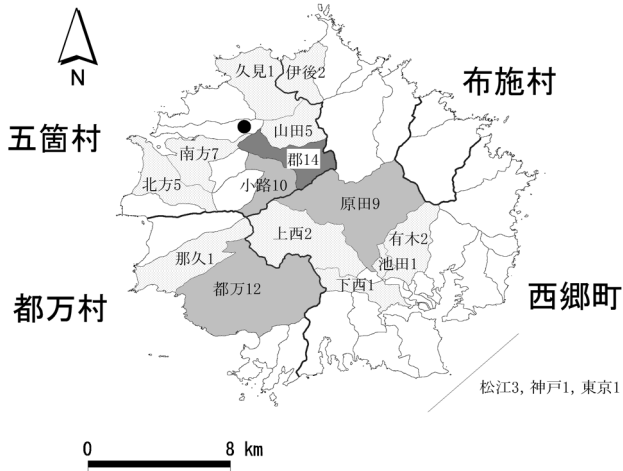


図10 五箇村一夜ヶ嶽牛突き場における一夜ヶ嶽大会の出牛圏（1994-2003）

注) 凡例は図2に同じ。取組表により作成。

う。ある時、練習試合をすると、黒を前に飼っていた牛主がたまたまそれを見ていたが、牛があまりに「がいになり」、さらに練習試合で転んで泥がついていたこともあって、自分がかつて飼っていた牛だと分からず「この牛はこの牛ですか?」と尋ねてきた。「あんたんとこからもらった牛だろ」と答えたところ、「うおーっ」とびっくりしていたという。

この牛はとにかく元気で、人を攻撃したことはないが、さまざまなハプニングがあった。5度も牛舎から脱走し、散歩の途中で綱はずれて走り出したこともあるという。綱が外れた時には、橋のふもとに牛が好きな赤土が置いてあるところを角で掘り始めたので、「これ、黒、黒」と言っていたら、だーっと50mくらい走って立ち止まり松井さんを待っている。朝の5時半くらいだったので車は来なかったが事故が心配であった。松井さんが追いかけると、走っては止まり、走っては止まりを2回くらい繰り返した後、ようやく捕まえたという。また、松井さんが風邪を引いて休んでいる時に、隣の牛主が代わりにえさをやってくれた。ところが、夜10時前に、ガラガラーンとガラスが割れた音がした。はてな、牛が出てへんかな、と懐中電灯を持って見に行ったら、牛の目がきらっと光ったのが見えた。黒は、牛舎の木戸をバラバラに壊した挙句、足が木戸の間に挟まって動けなくなり、近くにあったガラスを突いて割っていたのである。餌のやり方や手入れの仕方が普段と違ってのが気に入らなかつたらしい。臨時でもう一つの牛舎に入れ替えて、翌日に残っていた納屋の材料であくる日に木戸を作り直してもらった。他の人が散歩を代わってしてくれた時にも、逃げて杉の木を突いて丸坊主にするまで皮を削ってだめにしてしまい、松井さんが持ち主に謝りに行ったこともあったという。黒はその後、愛媛県の南予地方に転売し、向こうでも13歳まで活躍した。これらのエピソードから黒がいかに腕白で手のかかる牛であったかが生き生きとイメージできる。しかし、松井さんは「とにかく、可愛いやつでした」と語る。このような語り口を聞いていると、牛というよりも犬などペットを飼うような印象を受ける。牛主にとって、突き牛というのは、単なる闘いの駒ではなく、愛犬のような存在であり、そうした牛への愛着は日々の飼育の中で強くなっていく。体が大きく力がある分、育てる手間は他の動物と比べ物にならないくらい大きいですが、それはむしろ牛主の楽しみになっていく様子が分かる。

3. 3頭目の牛－突き牛の「共有」

松井さんが3頭目に飼ったのが「ぶち」という牛である。ぶちというのは牛の模様ではなく、牛の部位のことである。この牛は、尻の部分、腰骨がある部分が長かった。尻のことを「ぶち」というので、牛をそう呼んでいた。ぶちを見初めたのは1985年に八朔大会である。牛主の家に譲ってもらうよう、お願いに行き、「自分が好きな牛はこれしかおらん」と言ったところ、相手の牛主は「分かった分かった、すぐに買いに来い、でないとどんどん人が買いに来て値を吊り上げるけん」と承諾してくれ、大会の翌日である9月2日にすぐに買いに行った。ぶちは、1987年の全国大会に出場した。松井さんは、家ででの呼び方とは別に、大会に出す時の牛の名前は全て「鳳凰」で通している。隠岐の牛主は、牛の名前や名前にちなんだ刺繍をこらした「牛の着物」(化粧回し)を持っており、取組の前に観客の前で牛を引き回す「土俵入り」の時に牛の背中にかける。松井さんは牛の着物の模様にちなんで、この名前をつけた。着物を作ったきっかけは、妻の甥が呉服屋を営んでおり、花嫁が着る内掛けの裾にあった鳳凰の模様を牛の着物にどうか、と声をかけてくれたことである。その模様を切り取って、他の材料と一緒に京都の着物屋に特注し作ってもらった。模様は絹で作ってあり、光が当たるとまばゆいばかりに美しく光る。全国大会の会場に、この着物を着せて土俵入りしたところ、観客からは「どおー」という歓声が上がったという。

隠岐ではいったん牛に名前をつけると、別の牛も継続して同じ名前で出場させる。いわば牛の名前は、牛主の顔のようなものである。その名前にも様々な由来があり、牛主の思いが込められている。松井さんの場合には、呉服屋から声をかけてもらって、打ち掛けの模様をもらったのが命名の決め手となった。呉服屋は自ら牛を飼っていたわけではないけれども、松井さんのことをふだんから気にかけていたのでこうした提案にいたった。牛を飼う人だけではなく、その周囲でさりげなく牛主を応援する人々の存在が牛の名前にも込められている。

また、前の牛主の育て方が、松井さんが育てている時に意外なことから分かったというユニークなエピソードがある。ぶちを最初に飼っていたのは都万村の牛主であった。ぶちは、散歩をするコースに生えている柿の葉を食べる癖があった。在来種の柿で実はならない木であった。松井さんは、人間でも柿の葉をお茶にするくらいだから牛の体にもいいのだろうと思っていた。ある時に元主に「どうして柿の葉を食べるのだろう」と言ったら彼は笑って

「わしがママシを食わした時に、柿の葉っぱに包んでやりよった」と教えてくれた。元主のOさんは、精力をつけるためママシを乾燥させて粉にしたものを牛に飲ませることで有名で、隠岐では「ママシのO」と呼ばれている。この話からは、牛を転売することで、複数の人々が同じ牛との体験を共有し、その体験でつながっていくことが見て取れる。これも闘牛が作り出す縁の特徴である。牛主だけではなく、親戚や同じ地域に住む人も、様々な形で牛突きに関わることで、同じ突き牛にまつわる体験を共有していると言える。

4. 4頭目の牛 — 突き牛飼育の断念

牛主たちが口々に言う牛突きの楽しみの一つは、牛を突かせた後に集まって牛突きの話をするところである。松井さんは酒を飲まないの、その代わりに酒の席で出される鳥のから揚げやてんぷらなどをよく食べていた。それが原因か、1988年に胸が苦しくなって病院に行ったところ、血管が詰まっており心臓の手術を受けることになった。その頃、松井さんは4頭目の突き牛を飼っていた。手術は成功したが、医師から心臓に負担がかかることはやめるようにと注意された。牛突きの勝負を見るとドキドキするから心臓に大きな負担がかかる。そこで医師に「ドキドキしなくても勝てるように牛に言い聞かせております」と言ったところ、医師が「あんた、牛が勝ったら嬉しいでしょう？」と言うので「そりゃそうですよ」と答えたところ、「それがいかんのですよ、知らん間に心臓に負担がかかっている。即刻やめなさい」と言われてしまった。

松井さんは牛を飼育することを断念した。それでも他の人の牛を応援することに楽しみを見出している。兄弟の付き合いをしているTさんが大会の後、牛をパレードさせた時には、以前に松井さんが牛に着せていた着物をTさんの牛が着た。松井さんは、Tさんに「あんたの牛だから着物の（牛名や屋号などの）名前を変えてもいいよ」と言ったが、Tさんは「いやこれでいいから」と言って、松井さんの着物を着せてパレードを行ったという。

IV 担い手の体験にもとづく牛突きの歴史 — むすびにかえて

本稿では、一人の牛主に焦点をあて、その人の記録と記憶から、隠岐の牛突きの歴史を振り返った。個々の牛主の牛と過ごした経験や、牛にかける思いは、地図上のデータや年表だけでは表せない。本稿では、数字や地図にて

きるデータと合わせて、牛主に行ったインタビューを大きく取り上げることで、闘牛の担い手に対する意義を解明しようとした。隠岐の牛突きを対象とした石川（2005）に対し、以下の3点を付け加える。

1つ目は、石川（2005）で指摘した牛縁^{うしえん}についての具体的な例である。牛縁とは、牛突きを媒介として新しく作られたり強まったりする絆のことである。牛縁は、血縁や地縁と合わせて、隠岐における人々の交流を促進している。牛縁には、牛主同士、牛主と綱取り、家族や同じ集落など、さまざまな関係がある。本稿では特に、牛主同士の縁を取り上げた。松井さんとTさんの関係については、石川（2005）では牛の売買を介してできた関係として、わずか3文で紹介したに過ぎなかった。本稿では、売買の時にどのような出来事があり、それぞれの担い手がそれに対してどのような態度を取り、また何を感じたのかを松井さんへのインタビューをもとに詳しく記述した。こうした個々のエピソードを一般化することはできないが、牛突きを介した牛主のやり取りが、いかに人と人との絆を作っていくのかという点を鮮明に示すことができた。

2つ目は、闘牛における人と牛との関係である。石川（2005）では、人と動物との関係という観点を提示したものの、突き牛の飼育の過程において牛主がどのような体験をしているのかということに具体的に触れることができなかった。これに対し、本稿では、牛主が記憶している個々の牛のエピソードを1頭ずつ追った。そして、その牛が牛主に与えた影響や牛とのやり取りを通じて、牛主がどのように牛に対する愛着を育てていったのかを示した。松井さんがそれぞれの牛と関わっていく中で、島の人々との絆が強まっていったように、突き牛と関わることは、意図せずともそれを取り巻く様々な人々とも関わることになる。突き牛が地域の中でも注目される存在であること、転売によって複数の牛主が同じ牛との体験を共有することは、犬や猫などのペットとは異なる、牛突きの特徴である。こうした特徴が牛飼育の負担の大きさを上回る形で、隠岐の牛突きを維持してきたといえる。

3つ目は、出牛圏の変化が、牛主個人の経験にどう影響し、牛主がそれをどう解釈しているのかについての検討である。どこから牛が出場しているのか、というデータは1枚の地図として示すことができるが、それぞれの出場にまつわる突き牛や牛主の姿を示すことはできない。本稿では、松井さんが残してきた大会の記録と、松井さんのインタビューを合わせることで、出牛圏における背景として、牛主個人がどのような体験をしているのかを記すこ

とができた。

本稿では、隠岐の牛突きに対し、以上の3つの点を付け加えることができた。それぞれの地域における闘牛を俯瞰するような研究に加え、こうした個人に焦点を当てた研究を積み重ねていくことで、日本において闘牛が存続している要因や意義をより重層的に検討していきたい。

【謝辞】

本稿の作成にあたり、隠岐の西郷町の松井忠雄さん（故人）には、何度も快くインタビューに応じていただき、たいへんお世話になりました。そして名古屋大学地理学研究室の溝口常俊先生からは、指導教官としていつも温かい励ましとアドバイスをいただき、研究を続けることができました。溝口先生の講義に感激して地理学に転専攻して以来、先生のご指導のもとフィールドで過ごした日々は、私の人生に劇的なインパクトを与えました。本当にありがとうございました。溝口先生のこれまでのご指導に感謝するとともに、これからのご研究の発展とご健康を心よりお祈り申し上げます。

文献

- 石川菜央 2004. 隠岐の闘牛―担い手の社会関係に着目して―. 名古屋大学環境学研究科修士論文.
- 石川菜央 2004. 宇和島地方における闘牛の存続要因―伝統行事の担い手に注目して―. 地理学評論77-14 : 957-976.
- 石川菜央 2005. 隠岐における闘牛の担い手と社会関係. 人文地理57-4 : 374-395.
- 神村信幸 1994. 『牛突き覚書帳』隠岐絵の島花の島振興協議会.